琵琶湖は生命のゆりかご

(写真 左側)
大谷学園東大谷高等学校教諭
トンボ研究会会長
村木明雄さん

(写真 右側)
アクア琵琶レポーター
古川美華さん

琵琶湖・淀川水系と三重の一部だけにしかいないという、オオサカサナエってどんなトンボなんだろう。子供の頃、昆虫を飼ったこともあるわたしは、好奇心でわくわくしながら村木先生の後についてオオサカサナエが産卵をするという砂浜に降りていきました。

「夏から秋にかけて、オオサカサナエはこの砂地に面した湖面で卵を産みつけます。卵は沖合いまで波で流され、湖底の深いところで3～4年の間、幼虫時代を過ごし、成虫は夏に羽化し、林でしばらく過ごした後、成熟してから水辺に出てきます。オオサカサナエが琵琶湖の固有種になったのは、環境がぴったり合っていたからでしょうね」と村木先生の説明をお聞きしながら、トンボの姿を探しました。しかし、その日はあいにくの雨模様。一匹も産卵にやってこなかったのが、ちょっと残念でした。

そこでオオサカサナエが休息地にしているという林に移動。村木先生は特製の長い捕虫網で、木の高いこずえにいるオオサカサナエを鮮やかな手つきでつかまえて、見せてくださいました。お尻のところがふくらんだかたちが独特で、黄色の模様がとても鮮やかなトンボでした。

「オオサカサナエをはじめ、琵琶湖には98種類ものトンボが発見されています。大津市だけでも96種が住み、市町村別の種数では全国のトップですね」と村木先生。どうしてそんなに多いんですか、と質問すると「琵琶湖とたくさんの川やため池、湿地があって、そのまわりに山地と平野の変化に富んだ地形もあり、いろいろな種が生息できる多彩な環境に恵まれているからでしょうね」というお返事でした。

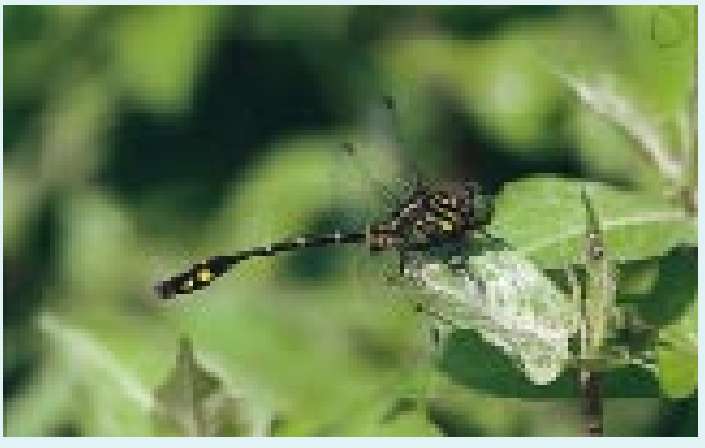
琵琶湖はトンボにとってもなくてはならない生命のゆりかごなんですね。わたしたちに何かできることはありませんか、とおきき しました。

「琵琶湖を汚さないようにするのももちろん大切ですが、ヨシ原や湿地、流入する河川とまわりの林といった身近な自然が実はトンボの生息に欠かせないということを、たくさんの人に伝えてほしいですね。トンボが住めなくなった環境が果たして人間にとって良い環境なのかどうか、みんなで考えてほしい問題です」村木先生のお言葉を聞きながら、わたしも水の風景の大切さ、生き物にとって大切な環境について、もう一度考えてみたいと思いました。

（古川美華）

●オオサカサナエ

琵琶湖・淀川水系を代表するトンボで、淀川など大阪付近で最初に見つかったことから、この名前がつけられました。中国や朝鮮半島にも生息することから、大昔は広く分布し、日本では琵琶湖近辺を中心に残ったと考えられます。古い歴史を持つ琵琶湖とともにオオサカサナエも進化し、この地に適応してきたのでしょう。



前頁へ　次頁へ